

氏名	猪俣 朋恵
学位の種類	博士（行動科学）
学位記番号	博甲第 8214 号
学位授与年月	平成 29年 3月 24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	Contributions of cognitive abilities and home literacy environment to Japanese Hiragana, Katakana, and Kanji acquisition: A longitudinal study from kindergarten to grade 2（ひらがな、カタカナ、漢字の習得における認知能力と家庭での読み書きに関する環境要因の貢献- 幼稚園年長から小学2年生までの縦断研究-）
主査	筑波大学准教授 博士（心理学） 山田 一夫
副査	筑波大学教授 医学博士 野上 晴雄
副査	筑波大学助教 博士（感性科学） 山田 博之
副査	臨床発達心理士会支部長 博士（心理学） 大六 一志

## 論文の内容の要旨

猪俣朋恵氏の博士学位論文は、日本語の読み書きの習得に関わる認知的・環境的要因について、特に家庭での読み書きに関する環境的要因とその後の読み書き能力の発達に関わる認知能力に焦点を当てて、幼稚園年長から小学2年生まで子どもを対象に縦断的に検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

まず第1章において、著者は、子どもの読み書き能力の発達に関わる認知能力と環境的要因に関する先行研究について概観し、ほとんどの先行研究がアルファベット語圏で行われたものであり、日本語の音読と書字の発達とその発達に関わる要因について、縦断的に、かつ読みだけでなく書字についても検討した研究はほとんどないことを指摘している。さらに英語圏の先行研究では、音韻認識に偏った検討を行われており、視覚スキルや音声言語の語彙力が、多くの場合分析に含まれていないことや、いくつかの重要な認知的予測変数を考慮しないまま環境要因について検討がなされていることを問題点として挙げている。また筆者は、子どもの認知特性によって、家庭での環境要因や介入の効果は異なって現れることから、家庭での読み書きに関する環境要因を調べる際には、子どもの認知能力についても考慮するべきであると述べている。このような背景から、本論文の目的は、日本語話者児童を幼稚園から

年長まで追跡し、認知能力、家庭での読み書きに関する環境要因、読み書きに関する包括的な検査を用いて、日本語の読み書き習得に関わる認知的、環境的要因を検討することであると述べている。また併せて、家庭での読み書きに関する環境要因と読み書き能力との関連における認知能力の調節効果についても検討することを目的としている。

続いて第2章では、日本の幼稚園児におけるひらがなの読み書き習得に関わる認知能力と家庭での読み書きに関する環境要因を検討することを目的として行った研究1について述べられている。研究1では、日本の幼稚園2園に在籍する5-6歳児333名(男児158名、女児175名)を対象者として、年長時の9月に認知能力とひらがな文字の読み書きスキルが評価された。認知課題としては、音韻認識課題(単語逆唱)、音韻性短期記憶課題(非語復唱)、呼称速度課題(rapid automatized naming task; RAN)、視覚課題(3種類の抽象図形の模写と直後再生)および音声言語の受容性語彙課題(PVT-R 絵画語い発達検査)が用いられた。また併せて、10月から12月の間に保護者へ質問紙を配布し、母親の教育歴、家計全体の収入、家庭での読書活動および読み書きの指導に関して聴取している。重回帰分析の結果、筆者は、単語逆唱、非語復唱、およびRANの成績が有意にひらがなの音読成績を予測すること、そして音韻処理と呼称速度が幼稚園時の日本語の音読の正確性と関連することを明らかにした。また、ひらがなの書字に関しては、ひらがな音読に関わる認知課題に加えて、図形の模写課題成績も有意な予測変数であることも明らかにしている。さらに、親の書き指導頻度がひらがなの書字成績の分散を有意に説明できること、すなわち書き指導を頻繁に行っているほど書字成績が高いことを示している。

第3章では、研究1の参加者を2年間追跡し、1年に1回、1、2年生の夏に読み書き到達度を再度測定し、就学後の読み書き到達度に対する初期の認知能力と家庭での読み書きに関する環境要因の貢献を検討することを目的とした研究2(縦断研究)について述べられている。結果として、筆者は、RAN課題成績が1、2年生ほとんどすべての音読課題成績を予測すること、さらに音韻認識も音読の流暢性と漢字単語音読の正確性を予測することを明らかにしている。また書字に関しても、音読での結果と同様に、RAN成績が1年生のひらがな単語書字、2年生のカタカナ単語書字に有意な貢献を示すことを明らかにした。環境要因に関しては、RAN成績の高い子どもで読書活動を頻繁に行った場合には刺激を早く読むことができた一方で、RAN成績が低い場合には読書の効果が認められないことが示された。

第4章では、以上の結果を踏まえた総合的考察が述べられている。結論として、筆者は、呼称速度と音韻処理に加えて、視覚スキルと語彙力も日本語の読み書きの習得の重要な予測変数であることを明らかにしている。また、幼稚園時のひらがな音読の正確性に加えて、呼称速度と音声言語の語彙力が日本語の読み書きの発達の予測に有用であることが確認され、さらに幼稚園時の読書活動が後のひらがな音読の流暢性に貢献することが明らかにされた。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

本論文は、日本語のひらがな、カタカナ、漢字を対象とし、読み書きの習得に関わる認知要因と家庭での環境要因について、幼稚園年長時から小学2年生まで縦断的に検討した初めての研究である。特に、認知能力が高い場合、読書経験のような環境的要因がより効果的であるという結果を示した一方で、認知能力が低い場合にはそのような効果が認められないという興味深い結果を示した。この知見は、教師や専門家が子どもの読み書き習得を支援する際には、子どもの認知発達に応じた支援をする必要があることを示唆しており、この点において本論文は高く評価できる。

平成29年1月24日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(行動科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。